

# 漢 日 語 不 定 量 表 現 研 究

## 中日両言語に於ける不定量表現についての研究

氏名:井上 云琳

学籍番号:2015m42003

### 要 旨

本論文は構造言語学、認知言語学、生成文法理論や語用論基本原理に基づき、帰納法や演繹法、中日対照等の方法を用いて語用事例を考察の対象とし、現代中国語における不定量表現の構文形式及び語用意味を考察したものである。

まず、現代中国語における不定量表現の語彙的な定義を明確にした。不定量表現とは、事物や人や動作の数量、及び動作と性質状態の程度は確定ではないものを表す構文表現形式である。本論では各不定量表現が表す不定量の特徴及びそれぞれの語法機能に基づき、“少量不定量表現‘点儿’”、“批量不定量表現‘些’”、“集合量不定量”、“时段不定量”、“程度不定量”、“中心不定量”、“概数不定量”の七大不定量表現形式に分類し分析を行った。同時にそれぞれの日本語対照表現についても考察し纏めた、副詞の「少し」、「ちょっと」、「くらい」、「程」等や接尾辞の「余り」によって表現することが多い、方位を表す「前後」のみは方位表現の原意から認知移転されて不定量表現形式として使われていること、かつ中国語の“中心不定量”の“前后”にかなり類似しているけど、数量不定量を修飾できることは両者最大の相違であることは明確にされた。

本論文は最初の序論と最後の結論を含め全九章によって構成されており、第一章から第七章までは各不定量表現についてそれぞれの分析研究となっている。

序論では、研究対象、目的意義、研究理論や方法、先行研究について纏めた。

第一章では、“少量不定量表現‘点儿’”について、前人の研究成果を踏まえ、“点儿”、“一点儿”、慣用表現の“有点儿/差点儿”に分け、それぞれの構文形式と機能、修飾可能な品詞類、不定量範疇について纏めた。“少量不定量”とは数量の不定少量、主観的少量または軽量という語彙を表している。

① “点儿”の場合は、修飾できる品詞によって、“点儿+N”、“点儿+ADJ”、“V/ADJ+点儿+V”の三つの形式に纏め、Nは有界（主観的少量又は軽量を表す場合に限定）・非有界・抽象名詞を含み、ADJは性質形容詞に限定しており、Vは動作・心理動詞の一部のみで、文の前に必ずV/ADJであり、単独ではVを修飾できないことを確認した。

② “一点儿”の場合は、肯定文では“一”の省略可能で、語法機能と語彙表現への影響が見られない、但し“一点儿+N”は主語である場合省略不可である。否定文では、“一点儿”+否定副詞の場合、“一”の省略不可、後ろの否定詞と呼応し完全な否定を表す；否定副詞+“一点儿”の場合、“一”は否定副詞によって省略可能。

③慣用表現の“有点儿/差点儿”の場合、両者の品詞性質を考慮せず、その構文機能及び表現形式について考察した。特に“有点儿+太+ V/ADJ”、“有点儿+很+V/ADJ”、“有点儿+不+V/ADJ”、“差+一点儿”+V/ADJ”等各特別な表現形式について詳しく分析し、それぞれの語法機能及び表す量の範囲を明言した。

第二章では、“批量不定量表現‘些’”について。まず“些”の量範疇については、少量から多量まで広量範囲に及んでいるけど、その中に部分量を表す使用例は80%まで占めていることはCCLの文例調査によって明確にした。次に、“一些”、“有些”、“指示代词+些”の各構文形式及びそれぞれ語法機能、対応品詞や特殊な構文形式について研究を行った。

①“一些+N”のフレーズは主語か目的語となる、Nは有界・非有界・抽象名詞を含み、部分的な不定量を表す。“些+个+N”という特殊な構文形式についても調査し、量詞“个”はより対象事物の物量性質を鮮明に表現するために、語用進化の過程で“些+个”という形式で誕生したものと推測した。

②“ADJ+一些”のフレーズは主に補語となる、ADJは性質形容詞となる、不定性質程度量を表す。“‘ADJ+些’+V”の場合は不定動作程度量を表す、ADJ+一些”フレーズは連用修飾語となる。

③“有些”については、“有些+N”の形式を用いて連帯修飾語か主語であり、部分的な数量を表す；“有些+V/ADJ”の形式で連用修飾語として使われ、低程度を表す。特に程度副詞“很”は“有些”の前に出現、“很+有些”の形で高程度を表して対応している日本語は程度副詞の「とても・非常に・大変」となる。

④指示代词+“些”についても論じ、特に極多量を表す“这么些”、“那么些”、“好些”の構文形式である。中の“这么些”、“那么些”は文の文脈によって、極少量を表すことも可能。対応する日本語は「こんなにたくさん」、「そんなにたくさん」となる、又は「この(これ)ぐらい」、「その(それ)ぐらい」「ただ~だけ」等となる。

第三章では、“集合不定量詞表現”について。まず、宗守云(2008)を参考に、73個の概数集合量詞を研究対象とする、中に日本語対応表現のないものを除外し、日本語と比較表現を重点として分析した。次は、各概数集合量詞の表す量範疇により分類を行い、全11タイプに分類し、日本語との対照表現を比較した。

#### ① 全置配集合不定量表現

中に“组、套、系列、段、副、进、堂”七つの集合量詞が含まっており、それぞれ対応している日本語の不定量詞について論じた。

#### ② 线状聚集不定量表現

中に“行、列、排、溜”四つの集合量詞が含まっており、対応している日本語は「列・行」となる。

#### ③ 串状聚集不定量表現

中に“串、嘟噜、挂”三つの集合量詞が含まっており、対応している日本語は主に「房、

一連、ひとくくり、一串」となる。

④ 円状聚集不定量表現

中に“堆、圈、卷、团”四つの集合量詞が含まれており、対応している日本語は主に「山・群れ、輪・周り、卷、一団」となる。

⑤ 面状聚集不定量表現

“片、层”の二つのみで、日本語の対照表現は「一面、階、重」がある、対照となる表現ない場合も存在する。

⑥ 束状聚集不定量表現

“把、束、绞、辮、绂、缕、撮”七つが含まれており、現代中国の語用範囲はかなり広く、特に“把”である。“把”は後に修飾する名詞によって「握り」、「束」、「群れ」、「ぐらい」等の日本語表現がある。

⑦ 叠状聚集不定量表現

“叠、沓、摞、垛”四つがあり、対照となる日本語表現は修飾する対象名詞によって違い、主に「束」、「重ね」等となる。

⑧ 簇状聚集不定量表現

“丛、簇、穗、蓬、墩”五つが含まれており、対照となる日本語表現は修飾する対象名詞によって違い、「叢（くさむら）」、「群れ」、「穂」、「茂み」となる。

⑨ 非状聚集不定量表現

“班、帮、拨、队、伙、支”六つが含まれており、主に「人」の量を表す、中に動物まで表せるものもある。対照となる日本語表現は主に「組・班」、「チーム・隊」、「群れ」となる。

⑩ 组织义集不定量表現

全部で九つがあり、表す対象事物によって“家、户、门、族”、“窝、窠”、“胎”、“垄”の四種類に分けて分析を行った。対照となる日本語表現はそれぞれ纏めた。

⑪ 围拢义集不定量表現

囲い込み用道具の違いによって四つに分類し、それぞれの具体的な量意義及び対照日本語について分析し纏めてきた。

A 人体关联类围拢义集合不定量には“抱、掐、拃、捧”四つが含まれており、人体部位と関連している。対照日本語表現では「一」が追加されている、「ひとつまみ」、「ひと抱え」、「ひと掬い」等となる。

B 工具关联类围拢义集合不定量には“捆、扎、担、挑”四つが含まれている。日本語の対照表現は「束」となるけど、四つの量詞が表す量の多少を区分することはできない。

C 容器关联类围拢义集合不定量には“包、盒、箱”三つがある。中の“盒、箱”とも日本

語の「箱」と対応している。但し、中国語の“盒、箱”のように外形の大きさを区分することは不可能。

D 運輸关联类围拢义集合不定量には“驮、车”二つがあり、対照日本語について調べた結果は「駄」のみ存在している。

第四章では、“辈子、会儿、程子、晌儿”四つの“时段量词”について。それぞれ表す時間量の相違及び対照日本語表現について論じた。特に中の“会儿”の不定量表現は最も広く使用されており、“半会儿/一时半会儿”、“这/那/哪+会儿”否定形式の“不一会儿”、“没一会儿”の固有構文形式について分析を行った。“半会儿/一时半会儿”は予想より長い時間量を表す特徴があり、“那+会儿”は“这/哪+会儿”と比べ、表す時間量は大きい、一つの年代まで表せる。“不一会儿”と“没一会儿”はともに短い時間量を表す、“不一会儿”は“没一会儿”より語用範囲広いことが確認できた。

第五章では“程度不定量”について。“程度副詞+ADJ/V”の形式で現れ、連帯修飾語や述語という語法機能を果たす。程度副詞の主観性の強弱によって主観・客観程度不定量の二つと、比較的性の有無により比較程度不定量表現に分類した。程度不定量表現が表す不定量の多少により、 $A < B < C < D < E$ の五量級を確立し、各程度副詞より構成された不定量表現の分析を行った。主観程度不定量は表す量級が高く、D、E以上となる。比較程度不定量は“更/更好+ADJ/V”と“越+ADJ/V”二つのみとなっており、程度量の増加変動を表す、特に“越+ADJ/V”は徐々に増加することを表す、対照の日本語表現は「～ば～ほど～」、「ますます～」となる。

第六章では“中心不定量”について。“中心不定量”とは確定数量フレーズの後に方位詞の“前后”、“左右”、“上下”を接続させ不定量を表す形式である。本論では“前后”、“左右”、“上下”の三者それぞれの不定量表現形式を分析し、三者の前に入れる数量フレーズ（時点性フレーズ、時間性フレーズ、固有時間名詞、事件性名詞、年齢、動作動詞、度量衡量詞）を実例に基づき分析し、三者の相違点を纏めた。日本語では方位詞の「前後」のみ不定量表現に使用されている。

第七章では“概数不定量”について。“单数概数、双数连用概数、数字成语概数”不定量の三タイプに分類し纏めた。

①“单数概数”不定量は確定数量フレーズの後に“多”、“来”を接続させ不定量を表す構文形式である。対照する日本語表現は「余り」と「ほど」となる。“多”、“来”は構文形式において、A 数詞+“多/来”+量詞(+名詞) B 数量短语+“多/来”+形容词という共通点がある一方、修飾できる量詞及び品詞の範疇は違っており、表す不定量の量範疇も異なっている。

②“双数连用概数”不定量は隣接する $XX_1$ の両数字を用いて不定量を表す構文形式である。 $XX_1$ は十以下の基数である。本文では“基本形式 $XX_1$ +量詞”、“ $XX_1$ +位数(十以上位数)+量詞”、“P(百以上位数)+ $XX_1$ +P-1(十以上位数)”の三つに分類しそれぞれ表す不定量の範囲を纏めた。

③ “数字成语概数” 不定量は数字入りの四字熟語によって不定量を表す形式である。表す量の多少により A 表概数少量、B 表概数多量、C 表示概数不定量の三タイプに分類し論じた。A タイプは主に “一・半”、“一・二” の関係数量詞が含まれている；B タイプは “四・五”、“千・万” が含まれている；C タイプは “七・八” の入っているのは三分の一を占めている一方、“三” と “二、四、五、九” の組み合わせもよく見られる。

本論の研究により、現代中国語における不定量表現を七つに分類でき、日本語においても同様に分類できるが、それぞれの種類の構成と用法は相異があるなどの初歩てきな結論を結んでいた。研究は日中対照研究の補充になり、類型論の研究及び両言語の教育に参考になれると考えられている。今後の課題としては、通時的な視点から各不定量表現の出現や変遷、及び相応理論根拠を分析することである。

キーワード:不定量表現 日中対照 構文形式 量範疇 共時言語学